

琉球大学学術リポジトリ

平成24年度トータル支援事業について

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター 公開日: 2013-05-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浦崎, 武 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/25954

平成24年度 トータル支援事業について

浦 崎 武*

Fiscal Year 2012 The Total Support Project

Takeshi URASAKI

琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センターでは2006年10月よりトータル支援活動がスタートし、本年度で6年が過ぎた。この活動は地域の子どもたちへの支援教育、保護者の子育て支援をすることにより地域社会に貢献すること、さらにそのことにより、子ども、学校、教育機関、関連機関、保護者との連携により学生、現職教員、特別支援教育支援員の実践力の向上、より良い実践へとつながる研究の発信を目指してきた。

当センターでは、「発達支援教育実践センター」に名称を変更し、新しい共通教育棟1号館に部屋を移して4年の時が流れた。さらに「特別研究員制度」は平成21年度に3人、平成22年度に2人、平成23年度は1人、本年度は八重山から3人を含めた4人が加わり、4年間で10人の特別研究員をセンター事業の協力研究員として位置づけた。特に昨年度からセンターの特別研究員、武田喜乃恵さんが相談員として常駐することができたこと、新たに運道恵理子（石垣市立登野城小学校）さん、本間七瀬（石垣市立新川小学校）さん、棚原こずえ（石垣市立まきら幼稚園）さんの3人が特別研究員として加わったことにより、八重山地域支援を中心に充実した地域貢献、教育実践、研究活動を実施することができた。

本年度は、センター事業として昨年度まで3年間、参画してきた「21世紀おきなわ子ども教育フォーラム」の報告書を作成した。特に八重山支援については2年目に入った「海プロジェクト（日本財団）」を引き継いで実施した。8月には新たな事業『教育・研究企画事業』に参画し、「発達障がいや支援の必要な子どもたちへの通常学級の教員および支援員への実践研修―トータル支援ネット事業―」と題して通常の学級および支援員にむけての研修会を開催す

ることができた。さらに本年度は琉球大学後援財団の「教育研究奨励事業」に参画し「支援の必要な子どもたちへの離島・へき地におけるトータル支援教室と公開支援セミナー」を実施するとともに、3月には琉球大学生涯学習教育研究センター主催の地域連携公開講座にも共催として参画し「気になる子どもの理解・子育て・支援―子どもの育ちと学びを支える―」と題して八重山地域で研修会を開催した。トータル支援事業は新たに他機関の事業に参画することにより、地域からの評価が高めることができ、当センターから発信する地域貢献事業を充実させることができた。

トータル支援事業は「トータル支援教室（集団支援教室）」を月二回、教員、学生および発達支援教育に関する専門家を交えて「実践事例研究会」を月1回、また教員や保護者を対象にした「相談支援」、子どもたちに継続的なサポートが必要であれば定期的に支援を行う「個別支援」等を行ってきた。支援を必要とする子どもたちへの支援教育実践活動を通して子どもたちの理解や教育者や支援者の教育のあり方について考えてきた。

当センターにおいて「トータル支援教室」は中心的な事業であり、今まで6年半で103回の支援企画を実践してきた。地域の子どもたちが支援を受け、保護者の子育てを応援し、現職教員、保育士、支援員、関連領域の専門家のリカレント教育の機会を提供し、大学院生や学生に実践教育の場を与え、行政などと協力して地域に貢献し、実践研究を深める支援を行っていることで、「トータル支援教室」と呼んでいる。また、子どもたちとの関わりを通して子どもの特性を多角的に捉え、支援教育の多様性を追求し総合的包括的に支援していく上でも「トータル支援教室」と呼んでいる。

* Faculty of Education, Uni. of the Ryukyus

この教室は個別支援、集団支援、学校および教育機関との連携支援、子育て支援という4つの柱から成り立っている。活動への参加者は、実践力養成の源となる発達支援、教育実践を行う。その活動の終了後、子どもたちとの関わりによるエピソードを具体的にとりあげ、反省会を行い、そして、その後、参加メンバーみんなで言う交流ミーティングを通して子どもたちの理解および支援のあり方を深めている。

トータル支援事業は7年目に入り、大学を拠点とした地域貢献および教育、研究活動を中心とする第1次段階から、「出前支援プログラムの構築」を目指す第2次段階として「トータル支援教室」、「実践事例研究会」、「相談支援」等の取り組みが定着し、4年前から第3次計画として大学から離れた離島・へき地へ地域連携型支援を目的に位置づけ「協働による子どもたちへの支援および教員、支援者の実践力養成システムの構築」、さらに第4次計画として「地域主導型の支援体制の構築」を目指してきた。そして本年は6月、2月に出前支援を行い、7月、11月、3月には八重山の現地スタッフを大学へお招きし、実践研修会を実施した。昨年10月に八重山地域支援の第4次計画、地域拠点型のトータル支援教室を実現することができ、本年度は八重山スタッフ主導型の活動「トータル支援教室in八重山」を発展させることができた。特別研究員の本間七瀬（石垣市立新川小学校）さんは、本年度から石垣市初の情緒障がい通級指導教室の担当となったことより、八重山でのトータル支援教室は、通級指導教室に通う子どもたちの支援の場にもなった。さらに八重山での取り組みは独自の発展を見せ、サポートする支援者を増やして活動を充実させるためボランティアとして高校生に参加してもらうことができた。地元の発達支援および特別支援教育に関心のある人材を増やすためのキャリア教育の場としても今後、発展させていく展望が開けた。本年度も昨年度に引き続き、八重山教育事務所を中心に、石垣市教育委員会、竹富町教育委員会、与那国町教育委員会との共催としてバックアップを得ることができた。

本年度も国頭地区の出前支援として金武町で、当センターに参加する子どもたちと国頭地区の子どもたちを交流させる1日キャンプ「トータル支援教室IN 国頭」を引き続き開催することができた。積極的に離島・へき地に出向き、地域の土壤に触れながら子どもたちや発達支援教育に携わる先生や支援者と関わり、ともに学び合うことができた。

大学を拠点とする定例のトータル支援事業においては昨年度に引き続き、「那覇市教育委員会」の支援員が実践力研修と位置づけて参加した。特別支援教育支援員をトータル支援教室で受け入れ、発達支援教育実践についてともに学ぶことができた。

12月に開催された沖縄県特別支援教育研究会は昨年度に引き続き、当センターも共催となり、専任や特別研究員が県内の実践研究を報告された教諭たちとともに議論する場が生まれた。

以上のトータル支援事業に関する実践研究の成果を紀要にまとめた。トータル支援教室に参加するひとりの児童に焦点を当てた集団支援の実践研究として「広汎性発達障害児との〈能動—受動〉のやりとりにおける変容過程—トータル支援教室の集団支援から—」（武田 喜乃恵）、今までのトータル支援教室の集団支援のアプローチを整理した「発達障がい児への他者との関係性を基盤とした集団支援—T S Gにおける自閉症スペクトラム児に対する直感的心理化への支援—」（浦崎 武）を報告する。

また、国頭地域出前支援の実践研究として「沖縄の自然環境を生かした国頭地区トータル支援教室—主体的に動き出すための支援—」（久志 峰之 大城 麻紀子 金城 明美 浦崎 武）、トータル支援教室における支援要素を、小学校の特別支援学級への通級指導へと還元した実践研究として「複数の他者との関係性に焦点を当てた発達支援の試み—特別支援学級への通級指導を通して—」（瀬底 正栄）を報告する。

最後に大学を拠点とする当センターに3年間にわたる個別支援の経過を「知的に遅れのない広汎性発達障害児童のトータル支援（3）—指示に反応し怒りを表出する小5男児とのかかわり」（金城 明美、浦崎 武）を報告する。

トータル支援教室 集団支援の実践研究

- ・広汎性発達障害児との〈能動—受動〉のやりとりにおける変容過程—トータル支援教室の集団支援から—
(武田 喜乃恵)
- ・発達障がい児への他者との関係性を基盤とした集団支援—T S Gにおける自閉症スペクトラム児に対する直感的心理化への支援—
(浦崎 武)

地域出前支援に関する実践研究

- ・ 沖縄の自然環境を生かした国頭地区トータル支援
教室－主体的に動き出すための支援－
(久志 峰之 大城 麻紀子 金城 明美
浦崎 武)

連携支援による実践研究

- ・ 複数の他者との関係性に焦点を当てた発達支援の
試み－特別支援学級への通級指導を通して－
(瀬底 正栄)

個別支援の実践研究

- ・ 知的に遅れない広汎性発達障害児童のトータル
支援（3）－指示に反応し怒りを表出する小5
男児とのかかわり－
(金城 明美 浦崎 武)